

□

足尾銅山の時代ならとにかく、約東時代の今日、公害問題でショックなニュースは珍しい。十勝管内中札内村の南十勝合理化デンブ工場の、紳士協定を破って不始末をくり返し、農協不信の厚い壁を作った。しかし、結果的には不始末の代償として操業二年目の四十四年、二億六千万円の設備費をかけタンク（濃液廃液）とデンブノカスを完全回収して家畜飼料に加工することとなった。

これで一応、札内川から廃液不法放流の心配は去った。河川公害は、これからも予想される。これ以上、河川の自然を失うこと

とは、北海道から北海道らしい河川を喪失するに等しい。以下は、公害記者の札内川



札内川からの報告

—デンブノカ公害始末記—

齋藤 禎 男

現地報告「デンブノカ公害始末記」

寒地農業の旗手ジャガ辛

騒動は、こんな風に始まった。

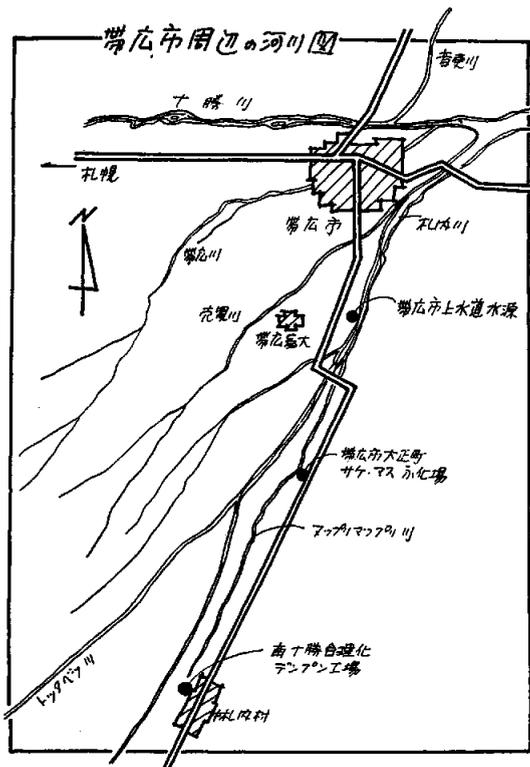
四十三年十一月二十三日午前十一時ころ編集部が電話が鳴った。この日は、勤労感謝の日。二日連休の初日。あいにくの「出番」。出勤前、コーヒー屋に寄り、ぼんやり時間を楽しんで来たばかりだった。「とにかく急いでくるように」情報網である。サケ、マス関係者が自衛手段として組織している汚濁防止協議会のパトロール隊が、夜陰に乗じてデンブノカ廃液を札内川へ放流していた「現場」を押さえた——というのだ。協議会事務所へ顔を出し、その足で中札内村へ車を走らせる。工場長は、いやな

顔をするだろう——そんなことを考える。帯広—中札内は車で約四〇分。「現場」を撮影したフィルム一本がポケットにある。朝刊締切時間まで、たっぶり取材時間はあった。

十勝地方は、純畑地帯。代表格が、豆類で年間の生産金ざっと二〇億円。北海道全体の五〇%を占める。冷害が続いて耐冷性に乏しい豆類が、なかば強制的に減反させられ、これに代わってジャガ辛、ビートの寒冷地作物が、あたかも旗手のごとく登場したのは四十年ころから。三十九年の大冷害が、いわば転換点になったといえる。自然サイドからいえば、ジャガ辛、ビートの両エース、まったく、いやな相手。河川を汚すこと、おびただしい。

当初、十勝には、土幌農協合理化デンブノ工場しかなかった。もちろん、小工場はあったが、年間二〇〇万俵（一俵六〇キログラム）処理の合理化工場に比較すると、二〇分の一程度。それが現在では、東部十勝合理化工場をふくめて四工場にふえた。北海道に合理化工場と呼ばれる工場約四〇工場。つまり、一〇%を十勝で占める計算である。

二〇万ヘクタールの畑作地帯。このほぼ中心点に人口十三万の帯広が位置し、放射状に国道が走る。交通の主役が鉄道からア



スファルト国道に変わっても土地の人は、昔どおりに「上り線」「下り線」「広尾線」といった呼びかたをする。南十勝合理化デンプン工場は、この「広尾線」五農協が、共同使用を目的として建設した。

「史上初」の十勝漁民大会

工場の建設場所が、中札内村の札内川敷地と決まった段階まで帯広市は、まったくツンボ機敷に置かれた。農協側も十勝支庁もサケ、マス対策だけに終始していた。これが、四十三年三月、中札内農協（梶浦福督組合長）をリーダー格に国の農業構造改善事業費を導入、二億五千万円の工費で年間八〇万俵（四万八千トン）の原料処理を計画した。

農協は、水利権を持っている帯広市、大津漁協などの同意を得なければ工場を新設できない。ところが四月中旬になって、話し合いがついていないのに工場建設が始まった。農業構造改善事業は事前着工を認めていない。事前の着工が明らかになれば補助はつかないことも予想され、あわてた十勝支庁は、支庁長名で工事中止を命じた。このあたりから雲ゆきが怪しくなってくる。

五月二十七日、帯広市民館は、時ならぬ大漁旗でにぎわった。「史上初」の十勝漁

民大会には三五〇人のサケ、マス業者が大津、広尾などから集まり「第二の石狩川にするな」と市中デモ行進、十勝支庁に押しかけた。帯広市民の飲料水は、札内川の伏流水。札内川の水質が「日本一」の折り紙付きとあって塩素殺菌だけで浄化設備を持たず、上水道として給水している。

「日本一」については、配水池へ入れないでストレートで給水を認められていることでも解かる。給水人口七万二千人。年間四千人の人口増加のために給水人口をおよそ倍の十三万人にふやす計画を立て、五月から工事を始めた。集水地である同市稲田町の札内川に直径一・二メートルの穴あきヒューム管を河床下五メートルに敷設、ここから飲料水をポンプアップする。ちょうど札内川を横切る形でヒューム管が埋められるわけ。上流でデンプン廃液を放流されたら、一体どうなる。帯広市も黙っていた。それなくなった。

工場下流にふ化場、水源池

十勝は、年間降雨量一、〇〇〇ミリを割る。ドライゾーンである。ことに札内川は流量が少なく、水産庁サケ、マスふ化場十勝支場の四十年から三年連続調査によると、枯水期の最低記録は、毎秒二トン（月平均値）通常が同一五〜二〇トンだから一

〇分の一程度に落ちる。札内川の水源地、日高山脈。融雪期には増水するが、この時期を見計らってデンプン廃液を放流するためには、冬期間、廃液を貯溜して置かなければならない。

工場新設は、強引に進められたが、結局は、激しい凍結が事故に拍車をかけることになる。札内川は、ほぼ南へ直線的にさかのぼり、工場の一〇キロメートル下流にサケ、マスふ化場十勝支場、二二キロメートル下流に帯広市の水源がある。ふ化場は、ヌップリマップリ川と呼ばれる湧水川を使用しているが、この湧水川は、札内川に並行して工場の二キロメートル下流で切れている。ヌップリマップリ川に廃液が流れ込んだら一億尾のサケ稚魚は、それこそ一網打尽である。漁民たちが、赤や青色の大漁旗を帯広市へ持ち込んだ気持ちも理解できようというものだった。

五月にはいると「帯広市民の飲料水に影響か」という内容の記事が、各新聞をにぎわし始めた。帯広は「おいしい空気と清い水」が、キャップレーズ。菓子屋が宣伝文句に「おいしい空気」などと使う土地柄。札内川デンプン工場建設するのを中止させよう——アンケートによる市民の動員は、相手が積極的だった。菓子屋の主人も主婦も、みんなが反対した。市議に動員をかけ

た狙いは当初成功した。市議会も動き始め、全市民的アンチ・デンプン運動になるかに見えた。

ツンボ機敷の帯広市、奮大

この間、開発局土木試験所。道立地下資源調査所の公式見解が届いた。札内川の水質が、砂利層であることは、地元の人達がよく知っている。しかし、新聞は、専門官の見解でなければ、正しいとしない。開発局土木試験所などの資料は、この意味で欠くことができなかった。四十三年五月一日付け回答は、地質資料にもとづいた調査結果で土木試験所は「札内川の地層は、地下二〇〜一〇〇メートルという深い層に粘土層があり、その上の砂利層に伏流水が、広く流れていると想像される。現在のふ化場用水は、伏流水の湧いているものと認められる。したがって、伏流水がおよぶ範囲でデンプン貯溜池を設けることは、きわめて危険である」と指摘、地下資源調査所も砂利層であることをあげて「廃液は流出する公算が強い。被害が起きないと考えることは困難」と判断を示した。新聞記者にとつてこれほどの励ましはなかった。

ところが、話しは、そう単純ではなかった。五月四日、帯広開発建設部で開かれた三回目の十勝公害防止対策協議会で道の代

表（農協代表ではない）は「コンクリートは、水におかれ易い。厚さ三十センチの良質粘土を使って土木工事をすれば、貯溜池から廃液の浸透するのは防ぐことができる」との判断を示した。この日の協議会に初めて帯広市も出席したが、話し合いは平行線をたどった。帯広畜産大学公衆衛生教室も、この日が「初日」だった。

第一池ポリエチレンが破損

これまでツンボ棧敷に置かれていた帯広市や帯広畜産大学も、やっと出席要請され、公害協議会は形を整え、札内川が危険なら大樹町を流れる紋別川に工場を移設してはどうか——との「改善の策」も示された。六月にはいり、問題は、政治的な解決で一氣に水利権者の同意となった。急転であった。

工場が、予定どおり建設され、デンブンプ液を春の増水期まで貯溜する池三面（貯溜能力四万五千トン）が完成した。しかし、良質粘土に変わって薄いポリエチレン布が、浸透防止に使われた。良質粘土は、搜しても見当たらなかったという。九月上旬、工場は操業を開始した。新聞記者も、やっと南十勝合理化デンブンプ工場から解放されたようだった。そして十月、廃液の第一貯溜池（一万二千トン）が破損して、こ

れを第二貯溜池（一万五千トン）へ移したという報告がはいった。被覆ポリエチレンに穴があったという。「何か」が、また、ぶり返した感じだった。

不法放流の現場を押える

予想どおりだった。操業開始七〇日目、十一月二十二日の夜、汚濁防止協議会のパトロール隊が、札内川へパイプ（直径五センチ）を使ってデンブンプ液を放流している現場を押さえた。計算では、四千トン近い廃液が「消えていた」。夜陰に乗じて、こっそり廃液を流すショックなニュースが、全道に報道された。話は、これだけで終わらなかった。

不法放流の五日後、二十七日、工場を調査した十勝支庁係り官によつて今度は、廃液を送る、塩化ビニールパイプが何者かによつて折られ、廃液が川原へ流れ込んでいた事実が発見された。パイプを折るには、二〜三人の力が必要だろう——こんな結論しか出なかった。もちろん「犯人不明」である。帯広市、大津漁協が水利権の同意を与える際「問題が発生した時は、ただちに操業を停止させる」約束だった。約束の責任者は、道公害課、帯広開発建設部など。緊急の協議会が開かれたが、結局、操業停止一日間でケリがついた。農業王国の公害

問題は、こうしたケースが多い。

この年の秋、水質審議会十勝川部会が、帯広市民会館で開かれた。主催者である経企庁から「十勝でデンブンプ公害の対策が見出されれば、北海道全体の問題が解決する。良い考えはないか」と、新聞記者団に問いがあった。これに対して「十勝川は、知つてのとおり、サケの「種川」である。石狩川は、水質基準はあっても死んだ川。それなら、デンブンプ工場を全部、石狩川へ移しなさい。原料芋の輸送費は国で負担することを考えるなら問題はないはずだ」と答えた。

年が明けて四十四年二月二十四日。十勝水産用水汚濁防止対策協議会の総会が開かれた。席上「第三貯溜池がからになっていった」事実が報告された。こんなことがあっていいはずはなかった。

第三貯溜池の廃液は一万六千トン。第一池は、すでに破損して使用不能。その第三池が、全量札内川へ流出していたという。

帯広開発建設部で調べてみると、四十三年十二月十八日から四十四年一月二十七日までの四〇日間にわたって「何時の間にか流出」が発見した時は、手はほどこしように「なかつた」の答え。からになってから、約一カ月が過ぎていた。ニュースにするにはあまりにも間が抜けていた。

凍結が流出をうながす

一日平均約四百トンのデンブンプ液が、知らぬ間に札内川へ流れ込み、帯広市民は水道料金を支払って、この水を飲んでいくことになる。その後の調べで、被覆ポリエチレンを風でとばないように押さえていた袋づめの石五〇個が、なくなっていたことも明らかになった。しかし、流出を促したのは廃液の凍結だった。

第一池破損の原因の一つにガス発生があった。このため第三池には、ガス抜き用の塩化ビニールパイプ（直径五センチ）七本を立てた。廃液が流出して水位が低下し、張った水の圧力が、ビニールパイプに加わり、これが被覆ポリエチレンを破つてしまった。大穴があいたわけである。工事担当者の帯広開発建設部の担当官——「責任な」とはいわれないが、貯溜池の設計は、道がしたもので私たちは、そこまでタッチできなかった「これが、南十勝合理化デンブンプ工場騒動である。工場は、四十四年から処理量を八〇万俵から百二〇万俵にふやした。中札内農協の梶浦福留組合長から市立おびひろ動物園に五〇万円の寄付があったのは、それから間もなくだった。五〇万円で園内にウサギの城「ブルーシヤトゥウ」が完成した。

（北海タイムス社会部）